

亀ヶ森地方の伝説

牛若丸と弁慶の石投げ

大迫と亀ヶ森との境にそびえているピラミッド型の山を諏訪沢森（すわさもり）と呼んでいる。

世は奥州平泉文化の中にあった時のことだという。この地方に巡回してきた牛若丸と弁慶とが諏訪沢森に登った。頂上に立って北の方を見渡すと、東から西に向かって勢いよく流れて来た稗貫川が、岩の目の岩根にぶつかって左折し、白波を立てて淙々として流れて行くのが見える。その対岸には、早池峰山をはじめとする北上山地の山また山が続いている。

しばらく、景色を眺めていた牛若丸と弁慶は、やがて、旅の慰みにでもと、登っていた諏訪沢森からどちらが遠くへ投げるかと、巨岩の投げ比べをすることになった。

まず弁慶が投げることになった。渾身の力を込めて投げた巨岩は、うなりを生じて空高く飛んで行った。そして、稗貫川の中ほどに、「ドボン！」と水煙を高く立てて落ちた。弁慶は得意満面といった表情を浮かべて、牛若丸の方を見た。牛若丸はすっと立ち上がり、そして、手頃の巨岩に駆け寄るが早いか、「ええい」という掛け声もろともに岩を投げつけた。しばらくして、「カツ」と音がして、土煙がパッと飛んだ。なんと巨岩は稗貫川を見事に越えて、岩の目の岸に落ちたのであった。

弁慶はあらためて牛若丸の非凡さに敬服した。弁慶の投げた巨岩は「中岩」といって、最近まで川の中にあったというが、現在は大水で流されて残っていない。

諏訪沢森の名前の由来も義経にまつわる話である。

平泉を追われた義経一行は再びここを通った。そのことを後を追ってやって来た静御前が聞き、素足のままこの山に登ったことから、「すあし森」と呼ばれるようになった。それがいつのまにか「すわさ森」となまって、現在の漢字が当てられたという。

また、諏訪沢森の近くにある河原は、義経と静御前が旅の途中で馬からおりて、静御前がその河原で手足を洗ったので、「静河原」と名が付いたという。 （「大迫郷土教育資料」）